



第 26 号

令和 元年 11 月 18 日発行

会 員 募 集 中

年会費 3,000 円

10月以降入会 1,500 円

歴研サロンにて

すべての学問を総合し、「邪馬台国山陰説」を説く

山陰古代史研究会 代表 田中 文也氏

去る 9 月 12 日行われた歴研サロンにて、山陰古代史研究会代表田中文也氏が邪馬台国山陰説を講演した。53 名が参加。古事記、日本書紀に書かれた内容を荒唐無稽とせず、全学問を結集し実証する必要があると説き、それに基づき、「邪馬台国山陰説」を説明。

続いて、当会員、岡将男氏が司会となり、二人で古代史の謎について質疑、討論を行った。田中氏の邪馬台国山陰説の要旨は以下の通りである。

1、はじめに

これまでの日本の歴史論争には、記紀風土記の「古代史論争」と、「始皇帝と徐福の物語」と、魏志倭人伝に基づく「邪馬台国論争」の 3 つがある。

私は、この 3 つの論争に自然科学・歴史学・考古学・民俗学・外国の文献などの全ての学問を網羅し総合的に解析する「古代史大統一理論」を提唱してきた。文字のない日本古代文明の謎を解くにはこの作業が必要である。私はこれを実行し、30 年余前から科学的検証作業を行い「邪馬台国山陰説」を提唱してきた。

2、自然科学からみた古代日本の様相（記紀に記録された地球環境と生物多様性の問題）

地質学・地理学・地球物理学の分野では、6000 年～7000 年前をピークに「縄文海進」という気候変動（次ページへ）



田中文也氏

歴・研・展・望

令和に入り、半年近くが経過した。10 月 22 日、即位礼正殿の儀が皇居宮殿で執り行われた。天皇陛下が「高御座」に立ち「国民の幸せと世界の平和を常に願い国民に寄り添いながら、日本国及び日本国民統合の象徴としての務めを果たすことを誓います」と述べられた。190 余国の代表などが参列し、皇后陛下は「御張台」に立ち、静かに天皇陛下のお言葉を聴いておられた。夜には饗宴の儀が開かれ、祝賀行事の儀は台風の影響も考慮され、11 月 10 日に延期された。当日、テレビにつきっきりだったという隣人は「日本の伝統を感じ、心から永久の平和を願った」と語り、横浜から出雲に帰る列車の隣席の青年は「日本の伝統を知り、朝からの激しい雨が式典の 30 分間だけ晴れ間となり、不思議であった」と話した。この日、国際的にも令和の時代に入った

ことを宣言されたと感じた。先の会報で、4 月 20 日天空に懸る十六夜の月に令月を感じたと記したが、五ヵ月経過した 9 月 13 日、快晴で満月が皓々として天空に輝き将に仲秋の名月でした。月見の宴などが各地で開催された。多くのアジア諸国でも名月を愛でる行事が行われると聞いている。数年前、留学生が墨痕鮮やかに名月の日に揮毫した「寿」を床の間に飾り満月の夜を過ごした。各国にはそれぞれ独特の歴史、伝統があり、その中には時代が如何に変化しても生きていくもの、変えてはならないもの（不易）と時代に対応し、変化するもの（流行）があり、久方ぶりに「不易と流行」について色々想起した。

岡山歴史研究会は「不易と流行」の判断材料を示す一役を担っていると思いながらそれぞれの講座、発表を拝聴している。（会長 石井 保）

が記録されている。当時は、少なくとも現在より海水面が 20 ～ 25 メートル程度高くなっていた (2013 年山陰古代史研究会調査結果等)。

従って、日本列島の平野部は全て水没。海進が始まる 14000 年前から海進が終わる 2400 年ほど前までの約 12000 年間、日本人は山か高台の地域に住んでいた。この事実が「遠い祖先が住んでいた地域が、今自分たちが住んでいる平野部よりも高い高原や山か高台の地帯であった」とには、古代の地球環境の変動の記録が正確に残されている。佐渡島を双子に産んだ」「吉備を児島に産んだ」などの国生み神話や、出雲の国の風土記の国引き神話には、古代の地球環境の変動の記録が正確に残されている。



＜佐渡洲を双子に産んだ＞



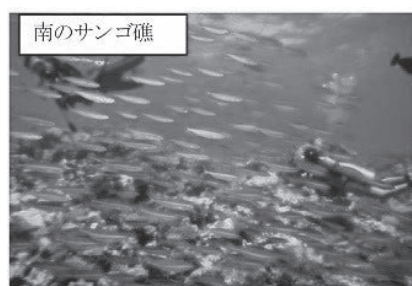
＜吉備を児島に産んだ＞



北のコハクチョウ



南のオオヨシキリ



南のサンゴ礁

この過去の地球温暖化データは、今後人類社会の研究テーマとして貴重である。次に重要な自然科学分野のデータは、生物多様性や動植物層の存在形態である。日本列島は、縦に細長い島国で、北海道は亜寒帯に、沖縄は亜熱帯になっており、その中間の青森から鹿児島までが温帯地域となっている。国際機関の調査では、日本列島は地球表面上で、固有種がガラパゴス諸島の 111 種よりも多く 130 種おり、地球全海洋面積の 0.9% しか占めない列島に、14.6% の海洋生物が生息していることが判明している。この結果、列島の中間地点である山陰地方には、北の動植物層であるコハクチョウと南の渡り鳥であるオオヨシキリが同時に生息しており、島根半島では、サンゴ礁や熱帯魚が住み、夏には海ブドウも取れる。この様子は、出雲国の風土記に「年中自然に市が立って、遊び呆けて帰ることを忘れる場所」と記録されている。山陰地方は、地球環境の中で唯一、南方種と北方種が同時に生息できる特殊な地域であるため、365 日常時食糧に恵まれていた。この動植物層の多さ (豊富な食料) が、農耕が出現する自然採集経済の段階から定住を保障し、世界最古の日本古代文明を地球上に育む条件を作ったと考えられる。

3、歴史学からみた古代日本の様相 (歴史学の科学的総合的検討)

国書である記紀の神代の記録は、ほぼ 100% 山陰地方の話しとなっている。古事記では、3 つの旧国 (稲羽、伯耆、出雲) の場所が具体的に書かれている分量は 80% にのぼり、山陰地方以外の他の日本列島の地域のことは書かれていない。従って、日本国家の公式記録を見る限りにおいては、この国は山陰地方を中心に出来上がったと書かれていると理解できる。

また、記紀にはこの国には「天津神」と「国津神」という 2 系統の神々が居たと書かれ、「国造り」と「国

譲り」の伝承が残されているが、これは世界中でも日本の国にしか存在しない大変特殊な物語となっている。

これまで、天孫が降りた「高千穂」は、「九州の宮崎か鹿児島」といわれてきたが、これは全くの間違いである。記紀に書かれているストーリーを順に整理すると、国譲り後高天原から天孫が降臨する場所は、①唐国に向かって東の日と西の日が同時に当たる場所。②ニギノミコトは、浜辺で木の花咲くや姫と石長姫を紹介された。③海幸彦と山幸彦の話は、海辺を舞台に展開。④ウガヤフキアエズノミコトの話も、浜辺（海辺）の出来事。⑤神武天皇は 45 歳の時、船団を組んで高千穂の宮から大和に向かって出航した。⑥神武天皇の船団は大分県の宇佐（宇佐神宮辺り）に着くまでに「30 日と 5 日間かかった」と書かれている。つまり、この記述からは、高千穂の宮は九州南部の山岳地帯ではなく、山陰地方の海辺（図の楕円の範囲）にあったと理解することができる。

この蓋然性が最も高いのは、高天原である蒜山に隣接する鳥取県中部地域であり、関連する痕跡が（長瀬高浜遺跡、琴浦町、高千穂など）現在も数多く残っていることで証明できる。

さらに、古事記、日本書紀、神賀詞、出雲国の風土記の 4 つの文献情報を横断的・総合的に解析すると、もともと次図のような関係にあったと考えられる。つまり、口承で

○=神武天皇の出発地=高千穂の宮があった場所



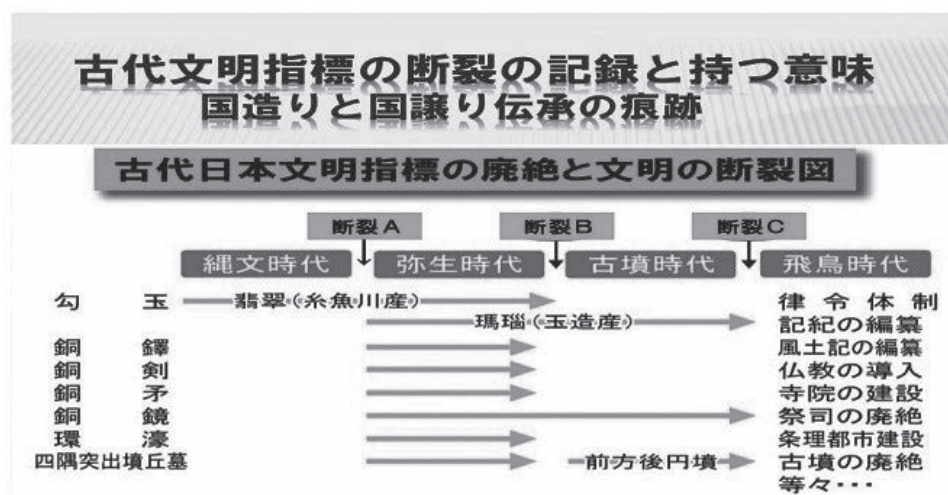
残されてきた膨大なデータ群を基に、記紀の編者達は、異なる文体と様相で、4 つの文献に役割分担をさせてまとめたのである。日本書紀は、当時の国際語であった漢文でそのまま書かれ一般の日本人には読めなかった。古事記は、漢字 1 文字を日本語の音 1 つに当てはめる「和文体」で書かれており、日本人でも読めるように工夫された。神賀詞は、天照大神とその息子の天穗日命との親子の会話で、現在の祝詞の原型となった。延喜式後存在が明らかになったが、本来は文章では記録されないハズの身内の会話だった。この作業の中で、左図のように出雲の国の風土記には、「国譲り神話」だけが 3 ヶ所にバラバラに差し込まれた。したがって、この 4 つの文献を一体の文書群と理解して、科学的・横断的・総合的に検証しない限り、今後の歴史学研究的進展はないであろう。

4、考古学からみた古代日本の様相（考古学データの科学的総合的検証）

「天津神」は、天津神の神殿として、「9 本柱の掘っ立て柱方式」の建物を建てていた。これが、現在の神社の原型であり、私たち日本家屋の原型である。記紀には、杵築の大社も「天津神の神殿」であると書かれている。この分布を整理すると下図のようになる。天津神の神殿は、中国山地に多く、一部が出雲地方にもあることがわかる。出雲地方の分布は、記紀に書かれている国譲り後、出雲地方天津神が国津神を祀るために降りてきた証拠と考えられる。



さらに左図は、「四隅突出墳丘墓」の分布図である。数学的知識を持っていた国津神達は、弥生時代の前半に「方墳」を作っていたが、その後



この方墳は、弥生時代後半に四隅突出墳丘墓に変化して、日本海側に広く分布する。これが国津神の痕跡であるといえる。上記の図は、考古学的発掘成果を全て整理した図である。

勾玉は石器時代から使われる世界最古の文明指標で、日本が世界最古の文明であることを表している。断裂Aで縄文時代が突然弥生時代に転換するが、糸魚川のヒスイは使われ続け、弥生時代に玉造のメノウも使われ、古墳時代には糸魚川のヒスイから玉造の花仙山のメノウに全て置き変わる。

銅鐸、銅剣、銅鉾の青銅器群は、祀りごとに使われていたが、古墳時代の前に廃絶され日本中で埋納される。山陰を中心に展開していた方墳や四隅突出墳丘墓は、古墳時代には「前方後円墳」や「前方後方墳」に変化し全国に展開する。断裂Bで途方もない変化があった。次に古墳時代が失敗し、古墳の廃絶が行われた結果、断列Cが現れる。日本の国を治める文明指標である古墳を無くした代わりに、当時世界最先端の中国の文明、文化、法律、宗教、文字等を輸入し、日本の国をリセットして造り変えた。この政策により、ようやく大和朝廷は日本を中央集権制の統一国家として治めることができた。山陰地方から出土する大量の青銅器群と鉄器群は、山陰地方がかつてこの国の中心であった証左といえる。

5、民俗学からみた古代日本の様相（民俗学の科学的総合的検証）

記紀には、科学と技術の記録だけが書かれていないが、これも日本だけの特殊性である。一方、民俗学の方野である鉄の伝承記録「金屋子神話」には、記紀には書かれていない科学と技術の記録である「製鉄」の話が書かれており、この記録と鉱物資源と製鉄の神々の分布が一致する。また、日本の民俗学的伝承の一つに「神無月」「神在月」の伝承がある。ある特定の時期に、その国の全ての神々がいなくなり、ある特定の地域に集まるという話は、世界中でも日本の国にしか存在しない極めて特異な伝承だ。これは、「暦」になって現在まで語り継がれており、青森県から鹿児島県まで日本中に伝承行事が残っている。これと対応する話は、「春になって田んぼにやって来て稲作を見守り、秋に稲刈りが終わると帰っていく」という「田の神伝承」だ。民俗学の方野を全て整理すると、田の神伝承には二通りのストーリーがあることがわかる。1つは田の神は「春になると山から来て山に帰る」という伝承、もう1つは「春になると出雲から来て出雲に帰る」という伝承である。後者の「出雲から来て出雲に帰る」という伝承が、「神無月」「神在月」の暦の元になったと考えられる（現在、前者は山の神になっている）。さらに、日本中の山の中で「セン」と呼ぶ山の約85%は、山陰両県の県境に集中している。山を「セン」と呼ぶのは、古代中国の「呉音」（漢音と唐音の前の発音）で、日本の古代に山陰地方を中心に古代中国の呉音を発音して使用する集団が、かなりの期間居住していた可能性が指摘できる。彼らは、国書では「国津神」と書かれ、全国の風土記には「オオクニヌシとスクナヒコ」と書かれ、民俗学では「田の神」と呼ばれ、各家庭では「大黒柱」として、今でも日本中に鎮座している。つまり、春になると全国各地に出かけて、稲作の指導や金属器の作り方・漢方による医術などの数々の科学と技術を伝えて回って、秋になると山陰地方に戻ってきていた集団がいたことを、国家のレベル・地方のレベル・地域の隅々のレベル、1人1人の国民のレベル等のそれぞれ異なるレベルごとに、日本人は明確に忘れることなく、今日まで記録し残してきたことになる。しかし、これらの記録レベルが異なっていたためと、それぞれの情報を研究する学問分野が異なっていたため、異なる別々の話として受け止められてきた。

まさに、横断的で総合的で科学的な検証が行われてこなかった証拠である。

6、外国の文献からみた古代日本の様相（国外の情報の科学的総合的解析）

邪馬台国論争は、「魏志倭人伝」をほぼ唯一の根拠に行われ、東大と京大が科学的検討を経ないまま、距離と方角の読み替えを行ったため、今日まで迷走を続けてきた。この方法論を続ければ、永遠に日本の古代史の謎は解けることはないだろう。しかし、三国志前後の文献情報を良く読み込むことで、邪馬台国の位置を推定することも可能となる。倭人伝には、当時日本の国は「もと百余国あり、使者訳の通じる国30国余の代表が集まって相談した結果、1女子を共立したら日本の国が治まった」と書かれている。事実「女王国」の影響の及んでいる国は29国（30国余）である。この29国の中で、最初の「始めて一海を渡る千余里、対馬国に至る」から、不彌国までは、旅程が当時の中国の距離の単位である「里」で示されているが、それ以降は距離の単位が「月・日」に変わる。「倭人は距離を知らずただ月と日も持って示す」と書かれている通り、不彌国までは中国の距離の単位で表され、その後は倭人の距離の単位で表されていることになる。したがって、不彌国までは中国の「里」で示すことができたが、不彌国からは中国の単位で表すことが出来なかったために、倭人の「月・日」を使ったと考えられる。倭人伝は「伊都国は郡使の往来常にとどまる所なり」と書かれており、伊都国の常駐の郡使が不彌国までは測量できて中国の単位が使えたが、それ以降は測量できなかったで、中国の単位では表せなかった。つまり、不彌国までは九州の中で、不彌国以降は九州から出た場所であると理解できる。又、不彌国から投馬国までは「水行20日」、投馬国から邪馬台国までは「水行10日陸行1月」と書かれているのは、不彌国から投馬国までは「陸行」で行けなかったから陸行がかかれなかった。つまり、海あるいは海峡を渡ったことが考えられる。そして、邪馬台国までは「水行」「陸行」の双方が書かれているのは、「水行」でも「陸行」でも行ける場所であり、その国の一部が海に面していたことを表している。すると、不彌国以降の旅程は、北部九州からの日本海側ルートか、瀬戸内海側ルートかのいずれかしか考えられない。逆に、大陸から日本を見た場合、倭国の中の国々をトレースすると、一番近い「対馬国」から順々に辿って行くのが自然である。大陸から離れた反対側の太平洋側や内陸部の国から辿っていくことは考えにくい。不彌国以降は、物理的に測量ができなかった。内陸国のことはわからないため、女王国以降は距離情報が無くなる。そうすると、大陸に面している国々、つまり、北部九州から日本海側ルートで順番に国を辿り、女王国の境界でリターンしてまた次の国を辿って行ったと考えられる。このルート（旅程記事）を整理すると、下記の図になる。

結局このルートは、神武東遷と同じ日本海側ルートとなる。記紀の35日と、魏志倭人伝の30日との間の5日間の水行のずれは、対馬海流に乗るか、それをさかのぼるかの違いだと考えられる。記紀によると、神武天皇は、塩土翁の助言により「今自分たちは、この国の西の方にいる。この地では、この国全体の統治が出来ない。東の大和に良い土地があるから、そちらに移ってこの国を統治したらよい」と助言され45歳の時に大船団を組んで、大和に向かって出航したと書かれている。魏志倭人伝の東行ルートは、対馬海流に乗った結果、神武東遷の西行ルートよりも5日早く着いたという事を示しているのである。

7、果たして、国津神とは何者か？（この国を造り、そして譲った集団）

ここまで、膨大な自然科学の分野、歴史学の分野、考古学の分野、民俗学の分野、外国の文献記録などを総合的に解析してきた。すると、結局すべての情報は全く同じ事柄をとらえていることがわかった。では、日本の国を造ってくれたうえに再び譲ってくれた御礼に、天津神が天津神の神殿を建て息子を置いて未来永劫祀り続けると約束した「国津神」とは一体何者なのか。2000年近く経った今でも、天皇家は、その約束を守り続けている。これが、この国の謎を解く中心点になっていることがわかる。この問題を解くため、古代中国の文献を探っていくと「史記」に辿り着

記紀の情報と魏志倭人伝の情報の重ね合わせ図

記紀と倭人伝の位置情報を重ね合わせると
結局、同じ場所を言っているのではないか？



いた。「史記」には、始皇帝と徐福の話が書かれている。今から 2200 余年前、数百年間戦乱に明け暮れていた中国を初めて統一した秦の「始皇帝」を騙して日本にやってきた「方士」の話である。

＜始皇帝の兵馬俑＞



始皇帝は、国家統一後亡くなるまでの約 10 年間「不老不死」の薬を探すだけに費やし、中国全土をくまなく歩いた。中国には古くから「神仙思想」があり、「中国の一番偉い仙人が不老不死の薬を持っている」という考えで、その一番偉い仙人は「中国ではなく、日本に住んで居る」という言い伝えになっていた。

この地は「桃源郷」とも呼ばれている。神仙思想は、中国の大元の思想で、宗教であり文化の源で、道教や儒教や墨教も発生した。

この「神仙思想」に基づき、元斉の国の方子である「徐福」が、「日本の国に行って仙人から不老不死の薬をもらって来る」と始皇帝をだます。徐福は、一度日本に船出するが失敗して帰り、土産物として「五穀と百工と数千人の少年少女」を用意するようにと再び始皇帝をだます。始皇帝が用意した「五穀と百工と数千人の少年少女」を乗せた数百隻の徐福の船団は、日本に向かって船出をしたまま帰ってこず、徐福は日本の「平原広沢」の地に落ち着き、王になったと書かれている。

日本でちょうど弥生時代が急速に展開、水稲稲作技術が本州の最北端の青森県まで伝えられ、村々で青銅器群の祀りが行われ、医術や鉄器を始め日本全国津々浦々に様々なサイエンスとテクノロジーが突如として行き渡る「弥生時代」とぴったりと重なる。私は、この徐福とその一団こそが、日本の国書では「国津神」と書かれ、全国の風土記には「オオクニヌシとスクナヒコ」と書かれ、民俗学的には「田の神」として日本中で祀られ、全国の各家庭では「大黒柱」として鎮座しているその集団だと判断した。徐福は、「百工と少年少女」をペアにして、春になると全国に出向かせ、秋になると報告のために帰らせていた。したがって、地方（風土記）では「大国主命（大人＝百工）と少彦名も＝少年少女）」と必ずペアで書かれ、民衆の中に深く溶け込み各家庭にまで入り込んだ。これらの膨大な文物や、当時日本には無かった数々の最先端のサイエンスやテクノロジーを中国から持ちこめる者がいたとしたら、そして、それを日本中にくまなく行き渡らせることが出来る者がいたとしたら、それは徐福とその一団以外になかったであろう。

江戸時代の国学者（本居宣長、新井白石）らも、銅鐸の起源は中国にあり、「その使用者は秦の人であり、天孫降臨前に大国主一派が日本中に伝えた」と考えていた。又、その後の研究者の多くが中国の文明の影響を肯定していたが、始皇帝と徐福の物語に出会うことはなかった。

8、おわりに（日本古代史研究の重要性）

今、世界は混沌としており、21 世紀の始まりは、9.11 のテロとそれに報復する戦争や民族紛争・宗教紛争によって、その幕が切って落とされた。1989 年からはじまった第 3 のグローバル化＝人類社会の最後のグローバル化によって、それまでのいくつかの仮説＝「文明の衝突」や「史的唯物論」も含めて、多くの論説が崩壊の危機に立たされている。20 万年前にアフリカで誕生した我々人類（新人）が、第 1 のグローバル化を始めて 10 万年余かけて世界中に分布した時間軸から考えて、人類の歴史や社会のメカニズムを解明するのは、天文学的なデータ量が必要となる。

古代の日本と中国に残された壮大な交流の歴史も、今でも残されている膨大な伝承や痕跡を正しく解析すれば、人類社会を理解する突破口になる可能性さえ指摘できる。

かつて、アルバート・アインシュタイン、ラフカディオ・ハーン、レヴィー・ストロース、ピーター・ドラッカー、アレクサンドル・コジュブなど、「天才」や「知の巨人」と言われた賢人たちが語った言葉に、今我々は真摯に耳を傾けるべきなのである。

これまで、日本の古代史研究は、歴史学と考古学が主役と考えられてきた。近代になって、民俗学がこれに加わり「古代学」の創出も叫ばれた時もあったが、国内外の情報を総合的に解析する方法論は取られなかった。しかし、そもそもこの程度の学問分野の動員や方法論で、北東アジア全域を含む両国の壮大な古代史の研究が進む道理はなかった。しかし、その扉はようやく開かれようとしている。これが今、北東アジア全域や人類の歴史研究全体に求められる本当の姿なのである。

岡山歴研ウォーキング「西大寺 ^{しんぎ} 宝木とりの道を歩く」

仲田 信一（会員）

去る 10 月 6 日、令和最初の歴研ウォーキング「宝木とりの道を歩く」が、実施された。参加者は 24 名。既に集合場所の西大寺駅に、ボランティアの方が 2 名迎えに来て下さっていた。当日は、暑いぐらいの良い天気、先ず会陽が行われる観音院を目指して、ウォーキングを開始した。到着後、ボランティアの説明を受ける。入口の仁王門の前の石橋は、津田永忠が大阪から招聘した河内屋治兵衛率いる石工集団によるもの、石門の寄進者名簿は頼山陽の筆によるもの、西大寺の発願に関わった皆足姫（みなたるひめ）の彫刻された瓦が本堂の屋根に載ること、牛王神社の屋根を支える見事な扇垂木が塩飽大工の手で造られたこと、等々教示いただいた。実際に宝木とりが行われる本堂大床では、8 間×5 間の空間に約 5 千人の裸群が争奪戦を繰り広げる。本当にこの空間に 5 千人が入るのかと驚いた。宝木が投下されると激しい肉弾戦が始まり、宝木のあるあたりは湯気が立ち上る。また大床の太い柱の内側が激しく擦れてつるつるになっているのを、触って確かめた。その後、皆足姫 TV（西大寺会陽ビデオ制作）代表の石邸氏により、宝木とりから会陽本番までの流れをビデオにて丁寧に解説頂いた。今回歩く宝木とりコースを本番では、菅笠に手甲脚絆の 9 名が草鞋履きで、深夜に約 4 キロ先の無量寿院まで無言で歩く。我々も観音院から同じコースを、無量寿院目指してウォーキングを開始した。

約 1 km くらい歩いて西大寺バスセンターに着く。ここで丁度お昼となったので、予定を変更して昼食をとることとなった。ここは旧西大寺鉄道の始発駅で、ここから大多羅、財田、原尾島、森下町を経由して後樂園まで通じていた。明治 44 年（1911）に開通し、昭和 37 年（1962）JR 赤穂線の開通により廃線となった。当時の客車キハ 7 号（前後のデッキに自転車を載せるスペースあり）が展示してあった。いわゆる軌間 3 フィートの狭軌で「軽便」の名で親しまれた。食事休憩の後、出発。更に 3 km 程歩いて広谷山の麓に着いた。ここから急峻な登りになった。途中 枝垂桜で有名な西方寺を見学し、最後の勾配のきつい石段を登ると無量寿院に到着した。ご住職の出迎えを受け、本堂をみせていただけたこととなった。宝木とり当日の準備、使者との対応の詳細も語られ、大変興味深く拝聴した。最近修復した極彩色の韋駄天立像も、間近に拝見させていただいた。ここ無量寿院からは西大寺市街が一望でき、遠く



無量寿院にて

小豆島、四国も霞んで見えた。かつて吉備の穴海であった事が実感できた。ここから約 1.5 km くらい歩いて大多羅駅に到着。ここで一応解散となった。更に健脚者は丸谷氏の先導で、250 段ほどの石段を登り、布施神社、大多羅宮寄宮を目指した。良い天気にも恵まれ西大寺の名所を巡ることができ、楽しい 1 日となった。

地方的銀行合同の先駆者 大原孫三郎 —全国の先駆となる一県一行の中國銀行の設立—（その3）

高橋 義雄（会員）

6 経営不振に陥る第一合同銀行と山陽銀行

（1）業績不振と不良資産の累積

岡山県下の金融界が1927年（昭和2年）の金融恐慌によって受けた痛手は意外に大きく、経済不況が益々深刻化する中で、第一合銀及び山陽銀とも経営内容を次第に悪化させる。

第一合銀は、1927年（昭和2年）上期には取付けの影響により8.7%と大幅な預金の減少を来し、同年下期も預金は微増に終わった。その後、第一合銀は二行から三行を合併したことや懸命の預金獲得活動により、預金は昭和4年上期までは微増傾向を辿ったが、同年6月末をピークに再び減少に転じた。貸出金も昭和3年上期から減少に向かい、3年下期には10%という大幅減少を来している。こうした状況から収益状況も次第に悪化していく。

農業が多く、金融孝行の影響が比較的少なかった山陽銀においても、預金は1929年（昭和4年）上期から昭和5年上期まで減少一途である。貸出金も昭和3年下期から減少に向かった。山陽銀は業容の拡大を図って、企業数の多い岡山県南への営業権を拡大するために、積極的に岡山県南の小銀行を合併して得意先の獲得に努力していた。しかし積極的拡大政策を推進したため、反面では多額の不良資産を抱え込む結果となり、収益を圧迫していく。

両行とも株価暴落により多額の有価証券の償却を余儀なくされて、収益状況はますます深刻化した。両行ともこうした局面の打開策として人件費、物件費等の経費の圧縮と節約に努めたが、これにはおのずから限界があった。当時の両行の状態は君島一郎日本銀行岡山支店長が「山陽銀行は肺病の第三期にあり、第一合同銀行は急性肺炎に罹っており、両行とも瀕死の重態であった」と語るほど重病であった。

一方、これとは逆に岡山県下に支店を有する財閥系の都市銀行の業績は好調で、金融恐慌を契機に経営不安の噂のある銀行からの預金預替が加速した。預金者の銀行選択傾向が強まり預金高が著増したのである。例えば、大正14年に開設された住友銀行岡山支店の預金は昭和元年末には200万円足らずであったが、昭和2年末には460万円、昭和5年末には900万円とわずか5年間に4.5倍の増加を示している。

こうした情勢下、営業基盤が競合する第一合銀と山陽銀が無益な競争をしていたのでは都市銀行との格差が更に開くことは必至であった。大蔵省、日本銀行との強い合併指導もあって、両行間に合併の気運が次第に盛り上がる。この際合併して効率化と合理化を進めることがこの難局を切り抜ける最良の方法であり、しかも地元金融界や産業界の将来のために必要で、且つ時代の要請でもあるという自覚が生まれたのである。

（2）大蔵省検査による不良債権の指摘

大蔵省の銀行検査は、制度的には明治31年に「銀行検査心得」が制定されたことに起点を持つ。その後、

第一次世界大戦下の 大正 5 年大蔵省銀行課の銀行局昇格に伴い検査専門事務官が 2 名配置され、大正 9 年の第一次大戦後の経済恐慌を契機に銀行検査義務拡張の必要性が大蔵省内で提起されて「銀行検査規定」が制定されるなど、徐々に検査体制が整備されてきた。その後、昭和 2 年に大蔵省銀行局に検査科が新設され検査官は 6 名から 18 名に大幅に増員され、併せて検査官補も動員された。これにより各銀行に対して 2 年に 1 回の検査実施が可能となった。この時の検査の特徴は、監督行政と検査が一体となっており、しばしば「銀行合同政策を補完する手段」として機能した。

昭和 2 年 11 月 4 日、先に滋賀県及び福井県の両県の検査を担当した大蔵省の山田検察官が岡山に派遣された。山田検察官は大蔵省の銀行合同方針に基づいて、まず岡山県下の二大銀行である第一合銀と山陽銀の合併を、各々の幹部に勧奨した。

第一合銀及び山陽銀は、お互いに競争して中小銀行の合併を進め、業容の拡大を図っていた。しかし、中小銀行の内容は玉石混合であるとともに、昭和不況の深刻化と共に、不良資産の増加、担保物件の下落、取付けの発生等から運転資金の欠乏、資産内容の急速な悪化が進み始めていたのである。

大原頭取はこうした状況下に①都市銀行支店は金利面で地元銀行より低い。②地元銀行は無益な合併競争を中止して、一体となって都市銀行支店に当ることを真剣に考えなければならない。③さらに広島・香川とも隣保相互扶助の親善政策を採り、一丸となって進めなければならないと考えた。その結果、大原頭取と中村常務取締役は、閑谷学の同窓で山陽銀取締役の安黒一枝と昭和 2 年末にひそかに会談し、両行の合併を打診した。山陽銀の安黒一枝取締役は山陽銀行土井頭取に第一合銀との合併を説いたが、土井頭取は賛成しなかった。

(3) 競争回避のための地盤協定締結と破棄

そうした状況下に、第一合銀と山陽銀は大蔵省より、合併の可否について答申を求められた。そこで両行はそれぞれの幹部が「合併に反対するものではないが、機運が未だ熟しておらず時期尚早なり」との答申を行った。大蔵省はこれを受けて、両行の合併は当面無理であると判断して、従来の合併を勧める指導方針を変更し、両行に対し無益な競争を回避できるように互いに地盤協定を結ばせた。大原頭取は、大蔵省の勧めに応じて地盤協定を取り上げ、未だ合併していない県南の倉敷大橋銀行、後月銀行が第一合銀と、県北の古町銀行及び英田銀行が山陽銀とそれぞれ共同提携するよう地盤協定を結んだ。そしてその内容を大蔵省に報告した。ところが、答申後、倉敷大橋銀行大橋平右衛門が異議を提出して、地盤協定を破棄し、昭和 3 年 5 月に山陽銀に合併した。

こうして両行の合併問題が頓挫している間に、不況がさらに深刻化して、貸出金の回収が延滞し、担保物件価格は値下がりし、両行の資産内容は急速に悪化を辿る。(つづく)



お知らせならびにお詫び

4 月の定期総会で運営委員に任命された藪下義文さんです。

写真が見つからず、25 号に掲載できませんでした。申し訳ありません。

藪下さんは高松市に在住です。廃棄物に関する論文で京都大学から学位を受けられました。

藪下義文氏

—郷土に輝く聖人— 仏教の宗教改革者「法然」その2

山田 良三（会員）

「法然」ゆかりの地を訪ねて

法然上人について、誕生寺や菩提寺、両親が祈願した本山寺、出身である秦氏ゆかりの錦織の地や、比叡山の黒谷、大谷の知恩院、長岡京市の光明寺などにも足を延ばした。

法然の生まれた美作国の現在の中心地は津山市です。出雲街道の要衝にあった現在の津山には江戸時代の初め森蘭丸の弟の森忠政が入封し、鶴山に城を築き津山城とした。その後、森家が断絶、改易され、松平家（結城）が入封し、幕末に至る。幕末から明治にかけて津山からは宇田川玄随や箕作阮甫など多くの洋学者を輩出している。津山は山間の小都市でしたが進取の気性に富み学問も盛んな町でした。

明治以降の津山の町に、後に「美作聖人」と称された人物がいる。それが元津山藩の御用商人錦屋の家に生まれた森本慶三です。森本慶三は津山の財界の中心的人物となった人です。東京遊学中に無教会派のキリスト教を広めた内村鑑三の弟子になり、津山に帰ってからは財界活動の傍らキリスト教精神に基づく教育や福祉事業に携わり地元に貢献しました。

森本慶三が私財を投じて建てたのが津山基督教図書館（現森本慶三記念館）です。その基督教図書館の開館式に森本は師、内村鑑三を招いた。この席で内村鑑三が集った地元の人たちに語った言葉は、「君たちは、この図書館でイエス・キリストについて学ぶことは勿論だが、ルターの宗教改革に先立つこと二百年、仏教の宗教改革をなし遂げた美作を代表する聖人、法然について学ぶことが大切だ！」と。このことは津山歴史人物研究会の近藤泰宏氏から伺った。

秦氏との深いかかわり

内村鑑三は法然のことを「仏教の宗教改革者」と高く評価しましたが、同じく宗教思想学者の山折哲雄氏も『法然と親鸞』という著作の中で同様の評価をしている。梅原猛氏も『法然の哀しみ』という著作の中で同様の表現をしている。

私は、法然が日本の宗教史に残る大変革者となった背景には、両親や一族の持つ信仰や生まれ育った故郷の風土が深くかかわっていたと見るべきだろうと考えた。そんな考えを持ちながら、法然上人の誕生の地である誕生寺を訪れ、住職の漆間徳然師の話をお聞きしたり、周辺にある縁の地の風土や歴史を学び、思いを巡らしてみ的过程中で法然という人物を生んだ美作の風土や人物の背景を少しずつ実感することができるようになってきた。

誕生寺と大銀杏

誕生寺やその周辺には法然上人の人となり育てた風土を物語る史跡が数多く残っている。誕生寺は、もともと法然の生家だったものを、法力房蓮上（熊谷直実）が寺院



誕生寺の大銀杏

に改めたものです。熊谷直実は源平合戦の折、須磨の海岸で平家の若武者平敦盛と出会った。未だ年若くわが子と違わぬ若武者を討つことを躊躇したが、「後々供養を！」と心に誓って、敦盛の首をはねた。そのことを心に深く持ち続けた直実は、法然上人のことを知り、建久三年（1193）、法然のもとに押し掛け、出家して弟子となった。

直実は出家した翌年、師の命を受け、師自ら刻んだ自刻像を背負い美作の地を訪ねた。すぐには生家が見つかりませんでしたが、あちらこちらと彷徨った末、ようやく稲岡の生家にたどり着くことができた。この時師の生家を仰いで涙したという地が残っている。JR 津山線誕生寺駅方面から誕生寺に向かい、丁度 JR 津山線の線路を潜ったところで看板が立てられている。師の法然は比叡山に登って以来、一度も故郷に帰ることはありませんでした。しかしながら故郷への思いは人一倍強かったことは間違いありません。だからこそ自ら像を刻んで直実蓮生に託したのでしょう。その師の思いを痛切に実感して涙を流した直実でした。直実は漆間家の旧宅を寺に改め、師から託された自刻像を奉じ本尊としました。これが現在の誕生寺です。今も誕生寺御影堂に奉られている本尊は直実が師から託されて背負ってきた法然の自刻像です。

誕生寺の山門は国の重要文化財となっている。その山門をくぐると、同じく重要文化財の御影堂が正面に建ち、左手に銀杏の巨木が繁っている。この大銀杏は逆銀杏と呼ばれ、少年時代の法然上人が修業に通っていた菩提寺からの帰路、杖にしてきた銀杏を刺したものが生長し大きくなったものだといわれている。

幼少の法然 勢至丸

法然の幼名は勢至丸と言いました。利発だった少年時代を物語る名前です。勢至丸は八歳から十三歳の間、母秦氏君の弟、観覚が住職を務めていた菩提寺で修行したと言われています。この間、何度か生家と菩提寺を往復したのでしょう。誕生寺から菩提寺までは今の距離で 40km 余り、少年の足でも朝早く出れば夕方には到着する距離です。

修業地である菩提寺には勢至丸が植えたといわれる大銀杏がある。樹齢 900 年、国の天然記念物に指定されている巨木であり、銘木百選にも選ばれている。その神木とされる銀杏の木が、菩提寺の麓現在の国道 53 号線奈義トンネル

を抜けた先にある阿弥陀堂の大銀杏です。菩提寺の大銀杏の脇には、学問成就を祈願した勢至丸が、この銀杏の枝を挿したものだといわれている。また誕生寺から菩提寺に向かう途上、現在の勝央町河原にも法然上人縁の大銀杏がある。出雲井の大銀杏とも呼ばれているこの銀杏の木は、勢至丸法然が菩提寺への道中、弁当の箸を挿したものが大きくなったといわれている銀杏の木です。

この河原の大銀杏の近くにある諏訪神社にはやはり名木としていられるビャクシンの古木がある。法然誕生の時代と丁度同じころこの地に住む諏訪一族の末裔である出雲井氏の先祖が、信州の諏訪神社の神を勧請して建てた神社だそうです。

法然と秦氏の縁を物語る錦織神社と本山寺

少年時代の法然は勢至丸という勢至菩薩にちなむ名前からも聡明で利発な少年だったことが、想像さ



法然旅立ちの像

れる。「法然上人絵伝」には、勢至丸が元気に遊びまわっている姿が描かれています。法然の父漆間時国は稲岡荘を司る押領使という役人でした。母は秦氏君と呼ばれているようにその出自は秦氏でした。美作には秦氏にまつわる史跡がたくさん残されている。

誕生寺の北方 10km ほどのところ、美咲町錦織に、秦氏にゆかりを持つ錦織神社がある。錦織は秦氏が多く住んでいた地で、秦氏に纏わる伝承を多く残している所です。錦織神社は明治初めの神仏分離令までは二上山両山寺と一体で、錦織神社は郷宮だったと錦織神社宮司に教えていただいた。二上山両山寺（美咲町両山寺）は、白山権現の開祖として知られるやはり秦氏の僧侶である秦澄が、霊夢に導かれてこの地を訪れ開山したと伝えられている修行場です。今は真言宗ですが、古来は天台と真言を共に修する道場で、それが寺名の由来です。この地域は美作の秦氏が入植し一大産地を築いた地域でした。法然の母は秦氏君と呼ばれ、秦氏の長者の娘だったのです。

法然の両親が安産祈願のために参籠した本山寺

誕生寺から逆に 10km ほど南の山中に、本山寺という寺院がある。津山藩代々の藩主の廟がある美作の名刹で、今でも立派な伽藍が現存している。この本山寺という寺号は鑑真和上に付けられたとの言い伝えもある。天台密教の山岳道場として永く地域の人々の信仰を集めてきました。寺伝によると、天永元年（1110）に現在地に移され、長承元年元年（1134）に法然の両親が安産祈願のために参籠したと伝えられている。両親の信仰深さがうかがえる逸話です。

本山寺の近くには斉明天皇により勧請されたとされる波多神社がある。この波多神社ですが、元は畑三社権現と言われたそうで、波多も畑も秦氏とかかわりのある名前であることから、秦氏との結びつきを知ることができる。

法然の漆間家と一族の立石家

誕生寺の本堂の後側、法然の父漆間時国と母秦氏君の廟である勢至堂と産湯の井戸に向かう無垢橋のたもとに棕木が立っている。ここには棕木に因む法然誕生の奇瑞が記されている。寺伝によれば、二流れの白幡が流れ来て棕の木

の梢にかかり、天の奇瑞が現れたそうで、この木は「両幡の棕木」と名付けられています。元の木は朽ち、現在の木はその後植えられたものです。

二流れの白幡の奇瑞は応神天皇誕生に際して八つの幡が下ったことと同じ深い意味がある、「法然上人行状絵図」などには記されている。

元、中外日報記者の山田繁夫氏の著書『法然と秦氏』には、「二流れの幡の奇瑞は、二流れのハタを秦氏にさかのぼる父・漆間氏の家系と母・秦氏の家系つまり美作の秦氏系豪族であった両家を見立てた表現であろう」と書かれている。



祈りの像

か」と記している。かつて中国山地一帯にはたたら鍛冶集団が数多くいて、誕生寺のある久米南町周辺にも多くの鉄滓が残っていることからそのことを知ることができる。

漆間家は美作国二宮の大庄屋を務めた立石家と同族だと伝えられている。美作国二宮は津山市二宮の高野神社のあるところですが、立石家は豪族でこの高野神社の神職も務めていたそうです。立石家の本姓のものは漆島で、宇佐八幡宮の社家であった辛島一族の漆島元邦が先祖です。この漆島元邦が封戸郡の立石に居住したことから立石を名乗るようになったのです。その一族が延喜年間に美作に来住したと伝えられている。この時、立石元邦の長男盛国が二宮の立石家を相続し、次男の盛栄が漆間を名乗って稲岡に居住し、その五代目時国の息子が法然上人です。

津山にきた内村鑑三が「法然に学びなさい！」と語ったことは前述しましたが、内村を津山に招いた森本慶三に協力した人物がいました。それが立石家の有力者、立石岐（たていしちまた）でした。立石岐は備中船穂の豪農小野家の生まれで立石家に養子として入った人物です。

立石岐は 32 歳で二宮村長になると、殖産興業と民権拡張のため同志と共之社を設立、地域産業の振興や自由民権運動に活躍します。養蚕・製糸業振興のために郡是（グンゼ）蚕糸・津山分工場を設立しました。「中国鉄道」の創立に加わり、現 JR 津山線の建設に貢献した。現 JR 姫新線建設に際しては自宅の土地を提供している。明治中期になると絹糸事業が衰退し、一時郷里の岡山に帰り司法省判事補を勤めます。このころキリスト教に改宗したと伝えられている。その後再び美作に帰り自由民権運動に挺身するようになります。同志とともに「美作自由党」を結成し、板垣退助と連携して議会開設運動を行い、第 1 回衆議院選挙に立候補当選、三期衆議院議員を勤めた。

立石岐は、晩年はキリスト教の伝道に勤しんだと言われている。森本慶三などを支援し、津山基督教会や森本の教育・福祉事業に協力した。津山基督教図書館の設立に際し津山を訪れた内村鑑三は立石家を訪れ岐と面会したと記録されている。立石家はもともと浄土宗で、一族にはキリスト教への改宗に反対する人もいましたが、「自分の改宗は、他力本願を説く法然の志を継ぐものである」と信念を貫き、キリスト教の布教にも努めたそうです。内村鑑三が法然をルターに比する宗教改革者として高く評価した背景には、立石岐の存在を否定できません。

浄土宗の宗紋の杏葉は、漆間家の家紋から来ており、立石家の家紋も、立石家が代々社職を務めてきた美作二宮高野神社の社紋も杏葉です。このことから法然と秦氏の立石家との密接な関係を知ることができる。

秦氏とは、新選姓氏録などによれば、応神天皇の頃、半島から渡来した氏族であり、神祇と殖産に秀でた集団だったと、大和岩雄著「秦氏の研究」には書かれている。魏志韓人伝には、日本が倭国と称された時代、半島南部馬韓の東に秦始皇帝の労役から逃れた秦人がおり辰韓（しんかん）人と名付けたとあり、この辰韓人が渡来して秦氏となったのではないかとされている。渡来系氏族の中でも最大数の一族であったと言われている。

美作をはじめ岡山県の各地には秦氏の渡来と定住を物語る地名や史跡が数多く存在しています。秦廃寺の残る総社市秦や幡多廃寺のある岡山市幡多地区などはその代表的な地域でしょう。瀬戸内市の福岡や備前市の香登などにも秦氏の伝承が残っている。岡山県の各地に残る秦氏に係る伝承や遺跡は、我々の郷土の文化や宗教に秦氏が重要な役割を果たしてきたことは間違いのないでしょう。その代表的な事例の一つが法然と法然の出自にまつわる秦氏の存在ではなかろうかと思われる。（次号へつづく）



浄土宗の宗紋

見て、さわって、楽しく 津山まなびの鉄道館

(公社)津山市観光協会 津山まなびの鉄道館 支配人 高田 宜嗣

津山市は津山城（鶴山公園）を中心に城下町が広がり、現在も当時の面影を感じる事の出来る城下町としての街並みが残されています。

津山城は、初代藩主である森忠政により入封後から 13 年の歳月を要し 1616 年に完成しました。明治 4 年廃藩置県、同 6 年廃城令、同 7 年には天守閣や櫓など建物は取り壊され、現在ある建物は 2005 年（平成 17 年）に再建された備中櫓のみです。ただし、城の土台として積み重ねられた素晴らしい石垣は今もなお、ありし日の天守閣を偲ばせるようにそびえています。

春には「日本さくら名所 100 選」に選ばれた桜、ソメイヨシノが咲き乱れ、本丸から見下ろす淡いピンクの絨毯を敷いたような眺めは春の風物詩となり毎年多くの観光客で賑わいます。

市域の観光名所といえば「津山城（鶴山公園）の桜」というイメージが定着していましたが、山陰と山陽を結ぶ要衝として発展した街の鉄道遺産が整備され、2016 年（平成 28 年）4 月に新たな観光地として津山まなびの鉄道館が開館しました。

津山まなびの鉄道館には扇形機関車庫と運転台という施設がありますが、関心のない方にはこういった施設かも知れないかもしれません。鉄道の最盛期には日本各地に扇形機関車庫や転車台が建設され、車庫は主に蒸気機関車の修繕や整備、転車台は車両の向きの入替えを行うなど国内の貨物や旅客輸送を支えていました。

中国鉄道として岡山駅—津山駅（現：津山口駅）が開業したのが 1898 年。（明治 30 年）その後、津山口駅—津山駅間が開通し、1930 年に転車台、1936 年に津山駅構内に津山扇形機関車庫が建設されました。1960 年動力近代化計画の実行いわゆる無煙化を皮切りに蒸気機関車が衰退するに連れ、扇形機関車庫と転車台も共に各地から姿を消していきました。

扇形機関車庫は、現在日本国内で現存しているものは 10 ヶ所程度となっており、現存するもので京都にある梅小路蒸気機関車庫に次ぐ 2 番目の規模を誇るのが旧津山扇形機関車庫です。

「旧津山扇形機関車庫と転車台」は、2001 年（平成 13 年）に経済産業省の近代化産業遺産に認定され、建設から今もなお現役として使用されている非常に貴重な施設です。

津山まなびの鉄道館は旧津山扇形機関車庫と転車台や 13 の鉄道車両を中心に展示し、車両には「デゴイチ」で知られる D51 形蒸気機関車 2 号機（ナメクジ型）や 1 両のみ製造された DE50 形ディーゼル機関車など津山でしか見ることができない貴重な車両も展示されています。

展示室として、岡山エリアを中心とした鉄道の歴史を学べる“あゆみルーム”や鉄道の構造や仕組みを体験しながら見学できる“しくみルーム”では、通票閉そく機を実際にさわって通票を取り出すことも出来ます。また、津山の町並みや古い木造駅舎などが残る因美線を中心にジオラマで再現した“まちなみルーム”では、ジオラマの中を N ゲージ車両が走り、一部の車両には車載カメラが搭載され運転士目線の風景がディスプレイを通して楽しむことが出来ます。

津山まなびの鉄道館は大人から子どもまで幅広い層に『見て、さわって、楽しく学べる』鉄道施設として人気を集め、市域の観光拠点として少しずつ成長しています。まだ出来て間もない施設ではありますが、開館から 3 年で 20 万人目のお客様をお迎えすることも出来ました。今後も鉄道の魅力を全国に発信するとともに、お越しいただいた方が満足いただけるおもてなしが出来るように努め、より一層観光施設として整備をすすめていきたいと思っています。

なお、学習施設として運営され、学校行事（校外学習、遠足など）として活用することも可能です、楽しく鉄道のことを学ぶ場としてもご利用いただければ幸いです。

津山まなびの鉄道館

場 所：〒708-0882 津山市大谷、津山駅より徒歩 10 分

電 話：0868-35-3343

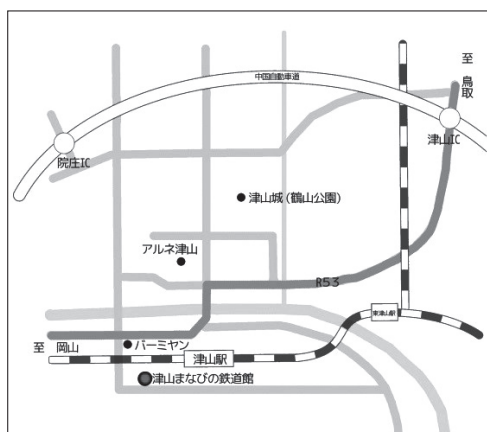
休館日：月曜日（祝日の場合はその翌日、12 月 29 日～12 月 31 日）

入館料：大人 300 円、子人 100 円

開館時間：9：00～16：00



扇形機関車庫と運転台



岡山歴史研究会

会 長 石 井 保

井 上 知 明（会員）

著書：

「洛中洛外図の世界 -室町時代の京都を見る-」
一番古い歴博甲本と信長が謙信に贈ったことで有名な上杉本を中心に、洛中洛外図の魅力を解説。

「日本史の謎を斜めから見る」

古代史を中心に、志賀島金印から本能寺の変まで日本史の謎に迫る。

各1,650円（税込）

郷土の歴史・経済・文化を語る講師
郷土の歴史・経済・文化研究会

会 長 高 橋 義 雄

〒710-0807 倉敷市西阿知町1131-1
TEL & FAX 086-465-7774

備中佐井田城跡保存会

会 長 中 山 亘

佐井田城：真庭市北房下中津井才田

山田方谷に学ぶ会会員

藤 井 義 和

岡山歴史研究会

副会長 山 崎 泰 二

岡山歴史研究会

監 事 湯 浅 一 郎

岡山歴史研究会

副会長 雪 吉 政 子

（五十音順）

歴研サロン 岡山の医学史(概説)

講師 大濱 文男

去る7月11日、歴研サロンで大濱文雄氏が「岡山の医学史(概説)」と題して講演。約30名が参加。解体新書以前の医学は中国の漢方医学が中心で、陰陽五行説や五臓、六腑から人間の体はできていると信じられてきた。江戸時代後期、オランダ語で書かれた解体新書が杉田玄白、前野良沢らにより翻訳されて、事実と照らし合わせる科学的な医学が始まったと説明。



文政6年にオランダ商館付医師として来日したシーボルトが鳴滝塾を開塾する。そこに伊東玄朴、高野長英、黒川良安の他、岡山県出身者の石井宗謙(勝山藩)・児玉順蔵(岡山藩)・石坂桑亀(足守藩)・箕作阮甫らがあった。石井はオランダ語の知識が抜群でシーボルトの娘イネとの間にタカをもうけた。児玉は伊木家侍医、児玉泰順の子で備前洋学の祖と言われる。

次いで、洋学が盛んであった津山には、「西洋内科撰要」を書いた宇田川玄随(1755～1797)を筆頭に宇田川玄真、宇田川榕菴らの成果を詳しく説明。ペリー来航時に米大統領国書を翻訳したり、幕府の設立した

藩所調所の主席教授となった箕作阮甫も津山の洋学者である。

それから岡山藩医学館・岡山医科大学の歴史を説明。明治3年に岡山藩が操山の麓に医学館を設置し、医学生教育を始めた。後に岡山藩医学館病院を併設し、数度の改称の後、明治13年に岡山県医学校として病院から独立した。明治19年には全国を5区に分割し、各区に1つの高等中学校を設置することになり、第3区の高等中学校の本部が京都に置かれ、岡山は第3区に属し、明治21年、岡山県医学校を廃止し、第三高等中学校医学部が設置された。これが大正11年に岡山医科大学になった。

岡山県には二つの医学部があり、人口当たりの一般病床数は全国で6位(2018年)である。この充実した医療資源は、津山での早くからの洋学の発展、そして明治3年の岡山藩医学校の設置にあると説明。

また、緒方洪庵が大阪に開いた適塾の門下生は1844～1862年に636人が入塾し、その出身は山口県が56人で最も多く、2番目は洪庵の出身地、岡山県の46人であったと説明された。

「山田方谷を大河ドラマに」100万人署名達成！

岡山歴史研究会も全面的に支援してきた「山田方谷を大河ドラマに」の署名がついに100万人に達成したことが藤井義和運営委員より先の運営委員会で

報告がありました。

ただ、来年は「明智光秀」、再来年は「渋沢栄一」に決まりました。実現にはまだまだ運動が必要です。

「日曜サロン」のご案内

「大化の改新前後の吉備と大和」と題して富久豊氏が講演します。奮ってご参加下さい。

日 時：12月15日(日) 午後1時30分～4時
場 所：岡山市北区川入「犬養土堂記念館」
近くに駐車場あり

吉備国の語り部の会、活動開始

去る10月23日、第1回の吉備国の語り部の会の活動が倉敷公民館で行われた。副会長の山崎泰二氏が「美作後南朝植月御所の秘史」と題して公演を行った。参加者は34人。

第2回目は11月19日(火)、笠岡市にある「サン

ライフ笠岡」にて丸谷憲二氏が講演を行います。演題は次の2件です。

「神武天皇の東征『吉備高嶋伝承考』」
「弧帯文石から見える楯築遺跡考」

編集後記

田中文也氏の「邪馬台国山陰説」を聴いた。真相を探し求めていく態度は理科系の手法で共感した。かつて大昔、高梁川は総社市の湛井まで海水がきっていて、総社市の街中を流れて吉備津神社の方へ流れていたといわれている。総社市の街中にはそれを示す遺構がある。また、鬼の城に上がって眺めると大きな川が吉備津神社の方へ流れていた様子が手に取るように見える。それに、蒜山探訪では、天照大神に関する天の岩戸や、長田神社や茅部神社があることを知り、蒜山こそ高天原ではないかと思われた。それからすると田中氏の「邪馬台国山陰説」も一理あると感じた。

法然上人が子供の頃修業した菩提寺の大銀杏がこの度の台風で太い枝が折れました。改めて、自然の力、風の力を思い知らされました。

津山学びの鉄道館、20数年以上前、棟田博氏作「吉

井川」がテレビで放映された。津山線が開通することにより廻船問屋がさびれていく話。明治の時代に新しい鉄道を引こうとする時代のエネルギーを感じさせられた。それに一役買ったのがこの施設です。(楠)

発行 岡山歴史研究会
会長 石井 保
編集長 楠 敏明
事務局 〒701-0204 岡山市南区大福415-14
山田 良三方
電話 090-1033-3327 (携帯電話)
FAX 086-806-2525
メール okayama.rekiken@gmail.com
ホームページ <http://b.okareki.net/>